3章　家族インタビュー調査

1.調査の目的と方法

中学生の意欲を測定するためのもうひとつの手段として家族インタビュー調査を行った。その目的は、家族が自由に会話する場面を録画し、分析することにより、普段、外部者には見ることのできない家族内でなされるコミュニケーションについて記載する。そして、それらと、中学生のふたつの意欲の大きさとの関連性を探ることである。

対象者は中学生を含む家族、9家族である。ケースを見つけるにあたっては、その地域のキーパーソンに仲介者として協力してくれる家族の内諾を得、その後に手紙によりインタビューの協力を依頼する。その際、謝礼を差し上げることも伝えた。原則としてきょうだいや両親など、一緒に住んでいる人全員に集まってもらった。

調査方法は、特定の課題を設定し、面接者が関与しない場面で家族の自由な会話をビデオに録画する課題面接(Task　Interview)の形式をとった。これは英国の家族療法家のキンストンらによって開発されたものに若干の手直しを加えて実施した(Kinston, 1988)。課題面接の目的は、家族の交流パターンを明らかにし、研究と臨床に役立てようとするものである。面接時間はおよそ50分にわたり、4～12歳の子どもがいる家族を想定して考案された。家族が自然に交流できるためには、たとえ観察者であっても第三者がいないほうがよい。キンストンらの原法ではあらかじめ録音しておいた指示を面接中に流して指示を与えるが、実際の面接では予定より早く課題を終えたり、長くかかるといった個々の差が出るため、この方法だと対応することができない。そこで、本研究ではビデオ録画装置を用い、別室で面接場面をモニターし、課題の遂行状況を見ながら臨機応変に時間を調節した。

実際の方法は次のとおりである。まず、家族を実験室に招き入れ、面接の目的要領を説明し、ビデオ録画と別室でモニターすることの許可を得る。この時点で、調査者は別室に退き、あとはインターフォンで被験家族に指示を与えた。面接室には、6枚の封筒の中に課題が用意されている。家族はそれを読むことによって指示を受けるのであるが、そのタイミングをインターフォンによって指示するのである。課題は次のとおりである。

1. もし、1時間ほど家族のみんなが自由に使える時間があったら、何をしますか?話し合ってみて下さい(4分)。

家族の共同作業の計画を立てるという課題は、多くの課題面接に共通してみられる(Lewis, 1976; Minuchin, 1978; Watzlawick, 1966)。比較的単純・明快であり、現実的でもあるので、導入としては適している。家族の情動の雰囲気、リーダーシップ、役割分担、コミュニケーションスタイルなどを観察できる。

2. このつみ木を使って、みんなで何かを作って下さい(5分)。

言語ではなく、動作主体の課題なので、年少の子どもが参加する機会が与えられる。机のものをどけて積み木を置く作業が入り、家族同士の身体的接触やお互いの位置を変える必要性も出てくる。家族の統率能力、柔軟性、役割の変化などを観察することができる。

3. 家族のそれぞれの人について、好きなところときらいなところを話し合って下さい（9分）。

言語による課題であるが、年少の子どももおもしろく参加できる。家族の問題や葛藤、変化することの希望なども出てくるので、家族の感情表現能力、家族の個体化と分離を観察することができる。

4. 次の文章を使って、空想のお話を作って下さい。「ある日、子どもたちはいつもどおりに学校から帰ってきました。すると、中学からとつぜん電話があり、担任の先生が『今すぐ学校に来て下さい』と言いました。さあ、なにが起こったのでしょうか....」(9分)

架空の物語を創造するということは難しい課題である。家族の持つ創造性、共同でひとつの物語を作る能力、抽象的概念を扱える能力、不安に耐える能力などが問われる。

5. ご両親にお願いします。つぎのことわざ(「秋茄子は嫁に食わすな」)をお子さんたちに説明して下さい(9分)。
(但し、もし子どもたち全員が知っている場合、あるいは親が知らない場合に備え、代替のことわざ「わざわい転じて福となる、猫に小判、飼い犬に手をかまれる、焼け石に水」も別封筒に用意してある。)

親が子どもたちに説明して納得させることができるかという点で、親子関係、特に親役割の遂行能力、両親が協力できる体制にあるかなどを観察できる。

6. 最後の質問です。このインタビューをやってみて、いかがでしたか?どのように感じましたか?自由に話し合って下さい(5分)。

この質問のみが、家族が比較的自由に話題を選べる。家族の積極性、自発性、活発さなどが観察できる。またこの質問は心理的に実験から解放させる作用(debriefing)もある。

2.結果の分析方法

結果の分析は、同じキンストンらの開発した家族健康度尺度(Family HealthScales)を用いた(Kinston,1987)。家族の健康という概念はその理論的背景によってさまざまに定義することができるが、ここでは家族システム理論でいう機能的な家族という点から定義されている。具体的な指標は表18のとおりである。

表１８　家族健康度尺度

A) Affective Status 家族のムード
- A1) Family atmosphere 家族の雰囲気
- A2) Nature of relationships 全体の家族関係
- A3) Emotional involvement 情緒的な交流
- A4) Affective expression 感情の表現
- A5) Individual mood 個人の気分

B) Communication コミュニケーション
- B1) Continuity 連続性
- B2) Involvement 参加状況
- B3) Expression of message メッセージの表現
- B4) Reception of message メッセージの受け取り

C) Boundaries 境界
- C1) Family's relationship to the environment　環境との関係
- C2) Family cohesion　家族の凝集性
- C3) Intergenerational boundary 世代間境界
- C4) Individual autonomy 個人の自律性

D) Alliance 家族の同盟関係
- D1) Pattern of relationships 家族全体の関係性のパターン
- D2) Marital relationships 夫婦としての関係
- D3) Parental relationship 両親としての関係
- D4) Parent-child relationship 親→子関係
- D5) Child-parent relationship 子→親関係
- D6) Siblings relationships きょうだい関係

E) Adaptability and Stability 適応性と安定性
- E1) Family stability 家族の安定性
- E2) Relationship to environment 環境との関係
- E3) Adaptability of family organization 集団としての家族の適応性

F) Family Competence 家族の力
- F1) Conflict resolution 葛藤や対立の解決
- F2) Decision-making 意思決定
- F3) Problem-solving 問題解決
- F4) Parental management of children 親のしつけ

＜家族健康度尺度＞

家族健康度尺度は6つの主要尺度と、それぞれについて3から6個の下位尺度からなる。順に説明していこう。

家族のムード(Affective Status)は5個の下位尺度からなる。家族の雰囲気(Family atmosphere)がよいと判断される場合は、交わされる会話や雰囲気が快適、暖かい、調和的、ユーモアに満ちて笑いが絶えない、なごやかか、活発かなどと表現される。反対に、静まり返っていたり、緊張感がある、不快、冷たい場合は低くなる。全体の家族関係(Nature of relationships)は家族全体をトータルで見た場合に受ける印象で、お互いのことを理解しているか、協力的か、お互いを尊重しているか、思いやりが見られるかなどである。お互いにけなしあったり非協力的で矛盾している場合は低くなる。情緒的な交流(Emotional involvement)はお互いがどれほど情緒的に交流しているかである。共感的で、なおかつ干渉し合わない場合は高く評価され、お互いに全く無関心、あるいは干渉しすぎ、おせっかいが入る場合は低く評価される。感情の表現(Affective expression)はそれぞれの感情が明確に適切に表現されている程度である。感情表現は豊かか下手か、それを表情、視線、身体接触などの交流より読みとる。感情が抑えられることなく明確に、自発的に、適切に表現されている場合に高く評価され、感情を表現できなかったり、全く不適切な表現しかできない場合は低くなる。個人の気分(Individual mood)は家族構成員それぞれの気分が安定して、場の状況に合っているか、会話を楽しんでいるかである。それぞれのメンバーの気分は安定しており、場の状況に合っている場合高く評価され、とても緊張していたり、落ち込んでいたり、居心地が悪く、ぎこちない場合低くなる。

第2の尺度であるコミュニケーション(Communication)は4つの尺度からなる。連続性(Continuity)は会話のキャッチボールがうまく行われているか、会話は自然かあるいはぎこちないか、ふだんの家での会話が多いか少ないか想像できるかなどである。会話がとぎれることなくスムーズに流れ、与えられた課題に則していたり、テーマに沿って話すことができる場合高く評価される。逆に、話題が断続的に変わる、あるいはひとつの話題に固執して次の話題に転換できないなどの場合低く評価される。参加状況(Involvement)は家族メンバーがコミュニケーションに参加しているかどうかである。全員の興味が集中し、会話から置き去りになっているメンバーがおらず、みんなが平等に会話に参加できる場合高く評価され、家族の一部のみの会話で、完全に除外されているメンバーがいるような場合低く評価される。メッセージの表現(Expression of message)は、メッセージを送る状況、つまり自分が言いたいことがはっき

り表現されているか、聞かれたことに対して答えられているかをみる。各メンバーが自分のメッセージ、言いたいことをはっきり表現している場合高く評価され、表現が抑制され言いたいことが言えていない、遠慮している場合低く評価される。メッセージの受け取り(Reception of message)はメッセージを受ける状況である。他人のメッセージがちゃんと受けとめられているか、人の話をどう聞いているか、相づち、返答しているかなどであり、すべてのメンバーの発言が共感的に受けとめられている場合高く評価される。相手の言うことを聞かなかったり、無視されている場合低く評価される。

第3の尺度である境界(Boundaries)は4つの下位尺度から構成されている。家族の環境との関係(Family's relationship to the environment)と家族の凝集性(Family cohesion)は、今回の課題面接では家族の外部とのやりとりがないので測定できない。世代間境界(Intergenerational boundary)は世代間の境界が保たれているか、子どもの人格は尊重されているか、子ども扱いしていないかなどである。世代間境界が保たれ、しかも柔軟な交流がある場合に高く評価され、世代間境界を乗りこえた(親子の)癒着関係・依存関係がみられる、あるいは世代間境界が厚すぎて、親子間の交流が全く見られない場合に低く評価される。個人の自律性(Individual autonomy)はそれぞれの個人としての自律性や独立性が保たれているか、おしつけがましいところはないかなどである。各メンバーの自律性・独立性が尊重されている場合、高く評価され、必要以上の干渉や介入が見られ、個人の自律性が保たれていない、親が子どもに介入しすぎている、だれかの意見を先取りしたり代弁している場合に低く評価される。

第4の尺度である家族の同盟関係(Alliance)は6つの下位尺度からなる。家族全体の関係性のパターン(Pattern of relationships)は全体として、協力的、共感的でまとまりがあるか、家族全体の関係は薄いか・濃いか、ふだん家族が一緒に行動していることがうかがえるかなどをみる。夫婦としての関係(Marital relationships)は夫婦の親密性である。夫婦として向き合うことができるか、お互いの目を見て話しているか、夫婦の会話は活発か、夫婦お互いのことを知っているか、日頃よく話し合っているように見えるかなどを測定する。両親としての関係(Parental relationship)は親としてふたりが協力できるかをみる。親の意見はまとまっているか、子どもに異なるメッセージを伝えていないか、子どもの理解(学校や友だちなどの情報)に差があるかなどである。家族のリーダーシップが両親でうまく配分されていればよいが、どちらか一方のみがリーダーになっている場合は低く評価される。親→子関係(Parent-child relationship)では親の子どもに対する関係をみる。親は、子どもとよい関係にあるか、親は、子どもによく話しかけているか、子どもにちゃんと

応答しているか、親は子どもからの挑戦や冗談をうまく受けとめているか、親は子どもに遠慮せず何でも伝えることができるか、親は子どもに心を開いているかなどが指標となる。子→親関係(Child-parent relationship)は、子どもが親とよい関係にあるかをみる。子どもは親に心を開いているか、親に気軽に話しかけることができるか、親の指示を理解し従うか、子どもは否定的なこと(きらいな面)なども話せるかなどをみる。

きょうだい関係(Siblings relationships)では、きょうだい関係がうまくいっているかをみる。具体的にはきょうだい間の会話はあるか、お互いのことをよく知っているか、積み木の課題や会話に平等に参加しているか、言いたいことを率直に伝えられるか、疎外されているきょうだいはいないかなどである。

第5の尺度である適応性と安定性(Adaptability and Stability)は3つの下位尺度からなる。家族の安定性(Family stability)は家族全体が安定しているか、落ちついた印象があるか、ひとりの人の意見に左右されていないかなどをみる。環境との関係(Relationship to environment)では環境の変化、まわり(環境)からの刺激やストレスに適応しているかをみる。面接場面に限定すれば、緊張したり取り繕っていないかがそのよい指標となる。集団としての家族の適応性(Adaptability of family organization)は環境の変化やまわり(環境)からの要請によって、家族が新しい状況へ混乱することなく移動できているかをみる。面接場面でも、普段と変わらずにいられる場合に高く評価される。

第6の尺度である家族の力(Family Competence)は4つの下位尺度からなる。葛藤や対立の解決(Conflict resolution)は今回の被験者は臨床家族ではなく特に葛藤や対立が明らかでなかったので、今回の調査では用いなかった。意思決定(Decision-making)は家族の意志決定がうまくなされているかである。積み木や「一緒にやることを考える」の課題で意見がまとまるかどうかが観察された。問題解決(Problem-solving)は家族に問題が生じたとき、それを解決できるかである。今回の面接では、課題をうまくこなしているか、家族のだれかから投げかけられた疑問や質問に、うまく答えられているかなどを評価した。親のしつけ(Parental management of children)は親が子どもをうまくしつけているかである。これは5番目の課題であることわざの説明で、親がうまく説明できているかなどを主に観察した。

これらの指標を用いて、9つの家族の面接場面を評価した。評価者は私の「家族関係学」の広義を受講している大学院生9名であり、それぞれの家族面接の場面のビデオを観察し、家族評価尺度に従って評価した。その手順は、まず下位尺度について、尺度の説明を参考にしながら5段階評価で記入する。その評価に迷うときは健康的な方(数字の大きい方)に評価する。つぎに主要尺度を評価する。この際、下位尺度の評価はあくまで参考であり、下位尺度の平均が主

要尺度の評価になるわけではない。それぞれの主要尺度・下位尺度で、評価者がよくわからない、評価しにくいと感じたものは空欄にしておく。結果として分析に用いるのは主要尺度のみで、下位尺度はあくまで評価者の便宜を考慮した上での指標に過ぎない。

3.結果

①家族健康度尺度による評価

結果を表19に示した。これは、9人の評価者の平均である。これは合計点の多い順に並べてあるが、家族の機能の多様性を比較するために、便宜的に合計得点の高い3家族を上位グループ、低い3家族を下位グループとした。この両者で家族の健康度の尺度を比較した。

表１９　家族健康度尺度による評価

家族	家族のムード	コミュニケーション	境界	家族の同盟関係	適応性と安定性	家族の力	合計	
A	4.78	4.78	4.00	4.56	4.67	4.56	27.33	上位グループ
B	4.67	4.33	3.89	4.11	4.22	4.33	25.56	
C	3.67	4.00	3.78	3.89	3.78	3.56	22.67	
D	4.00	3.67	3.67	3.78	3.78	3.67	22.56	
E	3.56	3.44	3.56	3.44	3.67	3.56	21.22	
F	3.56	3.44	3.22	3.33	3.56	3.56	20.67	
G	2.89	2.78	3.33	3.11	2.89	3.11	18.11	下位グループ
H	2.78	2.56	3.11	3.00	3.33	3.11	17.89	
I	2.44	2.56	3.00	2.78	2.89	3.00	16.67	

②家族内コミュニケーションの多様性

表20は、9人の評価者によって、それぞれのグループの家族を評価した際、補足的に印象を記載したものである。もともとそのような視点で評価したので回帰的な議論ではあるが、9家族を比較すると、いかに家族内で交わされるコミュニケーションは多様であるか理解できる。

表２０　家族内コミュニケーションの多様性（家族健康度尺度より）

	上位グループ	下位グループ
家族のムード	なごやかで落ち着いている 感情交流が好まれる みんなで一緒にいることを大切にしている 全員で一緒という雰囲気 民主的	一歩距離を置いた関与 会話に活発さがない ぎこちない雰囲気 お互いに気をつかっている 普段の会話が少ない
コミュニケーション	他者のメッセージや感情を尊重している 聞き手が共感している 言いたいことを言えている 会話がはずむ	他者のメッセージや感情を尊重しておらず、態度に現れている 聞き手が共感することが少ない 感情が抑えられている 会話がはずまない
境界	子どもの意見を尊重している ある程度の距離が保たれている	世代間の関係が希薄 子どもの意見を尊重していない
同盟	変化に対して民主的なリーダーシップ 夫婦関係は情緒的にぴったりしている 親子間に明確な境界線が引けており、親密さも兼ね備えている きょうだい関係が親密 役割が共有的で臨機応変に変えられる	夫婦のどちらかが気をつかっている 目を見て話すことがない 子どもに遠慮している きょうだい関係が希薄
適応性・安定性	落ち着いて安定している 一家団欒の場が大切にされている 環境の変化に対応できる	それぞれの場所にいることが好まれる
家族の力	柔軟な話し合いをする 皆で相談し決定に同意している ある程度寛大なしつけ	なかなかまとまらない 家族全員でという感じに欠ける

③上位／下位グループ家族のアンケート調査比較

また、家族の健康度と意欲との関連を見るために、上位グループ・下位グループそれぞれ3家族の中学生にやってもらったアンケート調査の結果を比較してみよう。ただし、これは6ケースでの比較であるので統計的な意味は持てない。あくまでも参考までにということであるが、表21をご覧頂きたい。学校に行くことが楽しいかという質問で、上位グループは3人とも「とてもそう思う」のに対し、下位グループは3人中2人が「まあまあそう思う」。学校に行くことの動機づけのうち、内発的動機づけは上位グループの方がやや高い。周囲の罰による外発的動機づけはそれほど変わらないが、集団性・友人との交流については上位グループの方が好ましい結果になっている。また、対人関係忌避傾向は下位グループの方が高くなっている。

表２１　上位/下位グループ家族の比較（参考）

家族	学校に行くことが楽しいか*1	学習に対する興味*2	周囲からの罰による消極的理由*3	集団性・友人との交流*4	対人関係忌避傾向*5
A	1	12	22	4	34
B	1	10	18	4	26
C	1	12	19	6	38
上位グループの平均	1.00	11.3	19.7	4.7	32.7
G	1	19	24	8	40
H	2	15	18	12	33
I	2	10	14	4	26
下位グループの平均	1.67	14.7	18.7	8.0	33.0

*1: 図1より「学校に行くことが（1: とても楽しい/2: まあまあ楽しい）」

*2: 表3.学校に行く理由の第１因子（数値が低いほど好ましい）

*3: 表3.学校に行く理由の第２因子（同上）

*4: 表3.学校に行く理由の第３因子（同上）

*5: 表5.「友人関係の質問」の第１因子

家族面接調査で明らかになったことをまとめると、家族の多様性である。一見、ごくふつうの家族でも、その中で交わされているコミュニケーションの実体はさまざまである。そのことは、家族というプライバシーのベールに包まれているので、あまり明らかにされないが、今回の9家族を対象とした面接からも明らかになった。そのことと、子どもの意欲について、直接的な関連を検証することはできなかった。しかし、参考としてあげた少数の比較から考えられることは、家族という基本的集団の中で毎日交わされている会話によって、集団性に対する基本的な訓練がなされる。それによって、家庭外の集団、すなわち学校での友人との交流の得手・不得手がある程度影響されるのではないだろうか。それによって、学校というインフォーマルな場における適応不適応が変化することも考えられる。この点は、家族環境と学校環境の関連性ということで、興味深い分野である。今後、多数のサンプルに対する調査から明らかにしてゆきたい。